

ドッグランの利用実態にみる改善計画について

関西剛康^{1*}, 鱒淵良人²

¹造園計画研究室; ²宇都宮市役所都市開発部区画整理課

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

Improvement plans based on the actual situation of the use of dog runs

Takayasu Sekinishi^{1*} and Yoshito Masubuchi²

*¹Laboratory of Landscape Planning and Design, Department of Environmental Horticulture,
Minamikyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan;*

*²Urban development part, Utsunomiya city office,
Utsunomiya, Tochigi 830-8540, Japan*

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

南九州大学研究報告 40A 別刷

Reprinted from

BULLETIN OF MINAMIKYUSHU UNIVERSITY
40A, 2010

ドッグランの利用実態にみる改善計画について

関西剛康^{1*}, 鱒淵良人²

¹造園計画研究室; ²宇都宮市役所都市開発部区画整理課

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

Improvement plans based on the actual situation of the use of dog runs

Takayasu Sekinishi^{1*} and Yoshito Masubuchi²

¹Laboratory of Landscape Planning and Design, Department of Environmental Horticulture,
Minamikyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan;

²Urban development part, Utsunomiya city office,
Utsunomiya, Tochigi 830-8540, Japan

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

Due to the recent pet boom, an increasing number of people keep dogs, and use urban parks for allowing their dogs to play and exercise. However, many municipalities still prohibit or restrict the entry of dogs to urban parks. As one solution, a dog run is attracting attention and becoming necessary as a park facility. At present, not only public dog runs operated by municipalities but also private dog runs exist, and the total number of dog runs is considerable. Dog runs are being established in rest areas of expressways and rooftops of buildings, etc. nationwide. This tendency indicates that dog runs will take significant roles for the society where people and animals coexist.

In this situation, some dog runs are being improved and becoming more convenient, but these are still to be developed and improved. There have been some previous studies on the actual situation and awareness of dog run users, etc., but there have been few researches for improvements of dog runs. In this study, the author analyzed the situation of and problems with dog runs, based on the survey of the use of urban park dog runs in Tokyo. Based on the analytical results, the author discussed future plans for bettering dog runs and proposed improvement measures.

Key words: actual situation survey, Dog run, improvement plan, urban park.

1. はじめに

近年のペットブームにより犬を飼育する人は増加している¹⁾。ペットフード工業会の平成17(2005)年度「全国犬猫飼育率調査」では、犬の飼育頭数は約1306万匹と推定されており、同年の東京都における犬の登録数は約41万頭とされ、都民31人に1頭の割合となる。そのため、身近に犬を遊ばせ、運動させる場所として都市公園を利用する犬連れ利用者が増加している。

しかし、このような状況下であっても、都市公園への犬の立ち入りを禁止している東京都市・区町の自治体は多い。東京都では、平成16(2004)年度に53市区町(島嶼地域を除く)を対象に実施した「都内市・区

立公園内犬取扱いアンケート」の調査結果において、その犬の立ち入り禁止理由の多くが「苦情が多い」、「飼い主のマナーが悪い」等であった²⁾。このような問題等が、犬を散歩させたり、遊ばせたりする場所としたい都市公園への利用を制限させている。そこで、この利用調整における解決方策の1つとして、ドッグランが公園施設として非常に注目され必要とされつつある。

このような背景から、平成18(2006)年度に東京都建設局公園緑地部公園課へ寄せられた犬関係の苦情・要望79件中、「ノーリード(放し飼い)に関するもの」が31件、「ドッグラン設置要望」が15件³⁾もあった。ドッグラン設置は、その以前からこれらの苦情・要望が後押しとなり、先進的な試みとして拡大している。東京都のドッグランは現在、都市公園では9箇所(表1)設置されており、その他、区や市が運営している公共のドッグラン⁴⁾や、民間のドッグランも存在する。また高速道路のサービスエリア、ビルの屋上等にも設置

*連絡著者

表1. 東京都の都市公園ドッグランの開設経緯¹⁰⁾

年月日		経緯内容
平成9(1997)年		東京都に「陳情」としてドッグラン設置要望が出ていたが、当時は断っていた。断っていた理由は、騒音、臭気等における周辺環境に与える影響が大きく、公園利用における犬の取り扱いについても住民の十分なコンセンサスを得られないからであった。
平成13(2001)年	後半	東京都は、犬に対する主な意見として「犬の放し飼いなどの苦情」、「犬を自由に遊ばせる場所がほしい」等の意見、要望が増加したため、ドッグラン設置へ向けて本格的に検討を始めた。
平成14(2002)年	8月	東京都建設局HP上で「ドッグラン」に関するアンケート調査を実施。さらに、ドッグランが公園利用者と犬との共存及び分離策として有効か否かを検証するため「駒沢オリンピック公園」「神代植物公園」にドッグランを仮設置した。「駒沢オリンピック公園」に仮設置した理由として、近隣住民に影響が少なく、「駒沢オリンピック公園に設置してほしい」という要望があったためである。また「神代植物公園」に仮設置した理由は、近隣住民に影響が少なく、用地買収として柵で囲われた未利用地があったためである。この2公園のドッグラン設置にあたり手本としたドッグランはない。当時のドッグラン設置の基本的な方針はあまりいじらず、予算をかけないで行った。また、ここではドッグランは「広場」の一形態として考えられていた。
	12月	社会実験として「駒沢オリンピック公園」「神代植物公園」でドッグラン試行実施。(6ヶ月間)
平成15(2003)年	6月	ドッグラン試行延長(10月末まで)。延長理由は、夏場の施設利用状況の把握とボランティア管理の充実を図るためとされた。
	11月1日	「①駒沢オリンピック公園」、「②神代植物公園」のドッグランが本格実施する。本格実施理由は、これまでの試行内容やアンケート調査等を検証した結果、施設維持管理、運営管理等について円滑に行われているからである。以後、都市公園にドッグラン設置が進むこととなる。
平成17(2005)年	6月25日	「③小金井公園」、「④舎人公園」、「⑤城北中央公園」のドッグランが開設される
平成18(2006)年	6月1日	「⑥小山内裏公園」のドッグランが開設される。
平成19(2007)年	4月28日	「⑦代々木公園」のドッグランが開設される。
	5月20日	「⑧蘆花恒春園」のドッグランが開設される。
	5月30日	「⑨水元公園」のドッグランが開設される

平成19年5月30日現在

されている。

また犬関係の法令等も整えられてきている。その1つに、人と動物との調和のとれた共生社会の実現に向けた具体的な計画として、東京都福祉保険局が平成19(2007)年4月に策定した「東京都動物愛護管理推進計画」がある。これには、犬の適正飼育の普及啓発の場として、ドッグランの施設及びボランティア組織を位置づけており、これからのドッグランが人と動物との共生社会に向けて大きな役割を果たすことを示唆している⁵⁾。

このようにドッグランの多くは日々進化し、利用しやすい環境になってきているが、まだまだ発展途上であり改善の余地がみられる。しかし既往研究⁶⁾には、ドッグランにおける犬連れ利用者の実態と意識調査等に関する事例はあるものの、ドッグラン自体における改善計画に踏み込んだ研究はほとんどない。そこで本研究では、まず東京都の都市公園ドッグランに関する利用実態調査を基に、ドッグランの利用実情、問題点等の分析を行った。その分析結果を踏まえ、ドッグランをより良い空間とするために今後のドッグランの施設計画等について検討し、改善策を提示した。

2. 利用実態調査

(1) 調査地及び方法

調査対象地は、東京都で最初にドッグランが本格実施された「駒沢オリンピック公園(以下、駒沢)」と、周辺に住宅地、商店街があり多くの利用がある「城北中央公園(以下、城北)」の2箇所を対象⁷⁾とした(表2)。

駒沢は東京都目黒区にあり、周辺には野球場、テニスコート、陸上競技場等の各種運動施設がある。また、サイクリングやジョギングコースが広い園内を1周しており、朝夕を中心に多くの犬連れ利用者と一般公園利用者が混在している。城北は東京都板橋区にあり、周辺にはテニスコート、体育館等の運動施設や児童公園があり、子供連れの公園利用者が目立つ。

各調査対象地の利用実態調査は、駒沢を平成19(2007)年8月8日(水)6:30~12:30と13:20~16:20、城北を同年8月9日(木)14:00~17:00に実施した。

調査項目は、「利用方法」、「飼い主の行動」、「犬の行動」、「トラブル等」、「利用割合」として、目視による利用行動の記録をとった。

(2) 調査結果

1) 利用方法

ドッグランの利用方法は、「犬を自由に遊ばせる」が60.3%と1番割合として高く、次いで「犬と一緒に遊ぶ」が20.6%であった(表3)。この「犬と一緒に遊ぶ」の結果内訳(表4)として、駒沢ではボールの使用は禁止であるが「ボールで遊ぶ」利用者が70.0%もいた⁸⁾。

しかし、利用状況を観察した限りでは両公園ともに、はじめは飼い主と一緒に遊んでも、途中から他の犬と遊んだり、ドッグラン内の臭いを嗅いだりして、自由になっている犬がほとんどであった。調査中、入場してから帰るまでずっと犬と遊んでいる飼い主はいなかった。

城北では見られなかったが、駒沢での利用方法には、通常利用を行う犬連れ利用者の他に、ドッグラン内で走り回る犬を楽しそうに見学する一般の公園利用者の姿を1割程も確認することができた(表3)。このドッグラン見学者は、犬連れ利用者以外の入場は禁止されているため、ドッグラン園外のフェンス越しから見学していた。見学者の中でヒアリング調査を行えた1組は、現在は犬を飼っていないが、昔に飼っていた経験のある愛犬家であった。

2) 飼い主の行動

ドッグラン入場時の行動としては、両公園とも入場してすぐにノーリードにする飼い主もいれば、リードをつけたまま歩かせ、周りの犬に慣らしてからノーリードにする飼い主もいた。しかし結局は、ほとんどの利用者がノーリードにして遊ばせていた。入場してからは、他の犬が入場する際に、自分の犬を抱きかかえる姿が見受けられた。それは特に小型犬の飼い主に多く見られた。

次に利用している間、駒沢では、多くの飼い主同士が会話していて犬を見ていないのが実情であった。またノーリードにした後で、自由に遊んでいる犬の側にいる飼い主は少なく、ほとんどがベンチに座っていた。一方、城北ではノーリードにした後でも犬の側に立って見守っている飼い主がほとんどであった。これは城北が駒沢よりもベンチの数がかなり少ないために、犬の側で立っている飼い主が多くなったと考えられる。

その他の行動としては、ドッグラン内での「喫煙」、「ベンチに座っての携帯メール」、「ドッグラン内への散水(砂埃防止のため)」等であった。

3) 犬の行動

犬の行動は大きく分類すると、「飼い主と遊ぶ」か「他の犬と遊ぶ」かの2タイプであった。前者の場合は、禁止されているボール遊びや、おいかっけっこして遊び、飼い主がベンチで休憩すれば犬も側で休んでいた。後者の場合はノーリードにされた瞬間に走り出し、他の犬とじゃれあい、一緒にドッグラン内の臭いを嗅いでいた。そして遊び疲れると飼い主の側で休憩し、飼い主の近くを歩いていた。

また日差しの強い時間帯は、犬は走り回る様子はなく木陰で休憩していた。

4) トラブル等

調査中は、人間が犬に咬まれるトラブルはなかった

表2. 調査対象地ドッグランの概要

項目	駒沢	城北
規模	1,200平方メートル	2,000平方メートル
舗装材料	コンクリート平板舗装	土舗装
施設内容	犬用トイレ, ベンチ, 水飲み場, 広場灯	ベンチ, 水飲み場, 物置

表3. ドッグランの利用方法別割合

利用方法	駒沢 調査数49組	城北 調査数14組	集計 調査数63組
1. 犬を自由に遊ばせる	27組 (55.1%)	11組 (78.6%)	38組 (60.3%)
2. 犬と一緒に遊ぶ	10組 (20.4%)	3組 (21.4%)	13組 (20.6%)
3. ドッグラン見学	9人 (18.4%)	0人 (0.0%)	9人 (14.3%)
4. その他*	3組 (6.1%)	0組 (0.0%)	3組 (4.8%)

※ その他利用は「犬に水を飲ませるために水飲み場を利用」、「犬連れの休憩スペースとして利用」、「特に何もしない」等である。

表4. 「犬と一緒に遊ぶ」の結果内訳

遊び方	駒沢 調査数10組	城北 調査数3組	集計 調査数13組
1. ボールで遊ぶ	7組 (70.0%)	1組 (33.3%)	8組 (61.5%)
2. 犬とおいかっけっこ	3組 (30.0%)	1組 (33.3%)	4組 (30.8%)
3. 犬とじゃれあう	1組 (10.0%)	1組 (33.3%)	2組 (15.4%)
4. フリスビーで遊ぶ	1組 (10.0%)	0組 (0.0%)	1組 (7.7%)

※ 遊び方の結果には、複数の行動パターンをしていた犬連れ利用者の組数も含んでいる。

が、犬同士の喧嘩は2件発生した。これは駒沢で、犬同士のじゃれあいから喧嘩に発展したケースであった。始めはじゃれあいなので飼い主もただ見ている程度であったが、徐々にエスカレートしてくると互いを引き離していた。

次に、ドッグランの周辺まで来ても利用しない犬連れ利用者が見受けられた。駒沢では24組、城北では2組であった。このうち駒沢の3組は先に入場している犬に吠えられたために入場を断念した様子であった。

また、城北ではトラブルはなく、糞の後始末もきちんとされていた。駒沢でも糞の後始末はほとんどの飼い主が適切に処理していたが、1人だけ後始末をしない飼い主がいた。かつ、駒沢では路上駐車をしてドッグランを利用した犬連れ利用者も1人いた。

表5. 人間と犬のドッグラン利用割合

種別	駒沢 調査数54人	城北 調査数16人	集計 調査数70人
人間	54人	16人	70人
犬	60頭	12頭	72頭
飼い主1人当たり頭数	1.11匹/人	0.75匹/人	1.03匹/人

5) 利用割合

表5に人間と犬のドッグラン利用割合を示した。調査の結果、駒沢の場合は犬の割合が多く、対して城北は人間の割合が多かった。ただ、両公園ともに人間と犬の割合に大差はなく、ほぼ1対1であった。しかし実情は、家族4人（両親と子供2人）で犬1匹を連れてきていた城北のケースに見受けられたように、複数人で犬1匹を連れてきたり、逆に1人で複数の犬を放したりすることは利用規定で禁止されているのに、1人で複数の犬を連れてきていたルール違反の犬連れ利用者も多かった。

3. 考察および改善策

調査結果に基づいた考察を行い、ドッグランの改善策に関する検討内容を後述した（図1）。

（1）多目的利用が可能な「慣らしエリア」

まず、はじめにドッグランに入場し、実際に利用するには、ある程度の利用経験が必要である。調査では、入場時に吠えられて利用を断念した犬連れ利用者がいたが、これら初心者と考えられる利用者が利用しやすいような施設計画にする必要がある。通常、多くのドッグランが「小型犬エリア」と「大型犬エリア」の2エリア構成となっている。そこにもう1つ「慣らしエリア」の設置を提案する。ほとんどのドッグラン利用の注意事項に「入場後数分ぐらいはリードを放さず歩行させ、他の犬に慣らすようにして興奮やショックを和らげましょう」と記載されており、犬を慣らすことの重要性が説かれている。はじめから他の犬がたくさんいるドッグランに入場させるのは初心者にとっては不安であり、またトラブルの可能性を高めかねない。そこで「慣らしエリア」を設置し、原則、初回から数回のみ利用可能とし、その利用時に飼い犬がドッグランを利用できるかどうか見極める目安をもつ。広さはあまり取らずに万が一トラブルが起きてもすぐ対応できる間隔を飼い主と犬が保てるようにする。

また通常はボランティアの協力の下で、ルールやマナー教育の普及啓発を行える場所としても使い、今後の犬の適正飼養の意識を高めるスペースとしても活用することで、人と動物との調和のとれた共生社会の実現を図る。

（2）遊戯性のある「丘」

次に調査の結果、利用方法の多くは「犬を自由に遊ばせる」であり、一緒に遊ぶ場合も禁止されている

「ボール遊び」が多かった。そのため安全で、かつルールを厳守し、犬が退屈しないで、楽しく遊べる施設が必要だと考える。しかし、ほとんどの公共のドッグランでは犬用の運動用具の設置を禁止している。おそらくトラブルの原因になる可能性が高いためであろう。そこでトラブル性の高い運動遊具ではなく、安全性を考慮し、かつ維持管理が簡単な土等で造成した「丘」をドッグラン内に造り、犬たちが上がった、下ったりすることで、遊戯性をもたせることを提案する。この場合、視野の確保を考慮して1m程度の造成高とする。

（3）「ベンチ」について

1) 休憩用ベンチの有無とマナー教育

次に、ベンチに関することである。ほとんどのドッグランにはベンチが設置されていたが必要性に疑問がある。その理由は、特に駒沢ではベンチがあることにより利用者のほとんどはベンチに座っていた。そのためノーリードにして自由にした犬の側にしようとしぬい飼い主が目立った。これでは万が一の際、トラブルを未然に防止することができない。一方、城北ではベンチがあまり設置されていないため、飼い主は立ちながら犬の側にいた。

この調査結果を踏まえて考察すると、すべてのベンチを不必要とするのではなく、ベンチを休憩、荷物を置くために利用していたことを考慮して2、3個程度の設置が望ましいと考え、少なく設置する改善策を提案する。また一つのベンチに複数の飼い主が座ると、その飼い主の犬同士が喧嘩する可能性が発生するため、一人用のベンチ（手荷物も置けることを考慮して90cm程度の長さの座面が適当）を入口から離れた場所に、それぞれ離して設置する。

また、逆に休憩用としてベンチを多く要望された場合は、必ずベンチでの休憩の際にリード着用を義務付け、飼い主が犬の側にいるようにするようマナー教育を徹底することを提案する。

2) 見学者用ベンチの設置

また他の調査結果として、犬連れ利用者以外にドッグラン園外から見学していた一般利用者がいたことが判明している。ドッグランが犬連れ利用者だけではなく、一般の公園利用者にも有用施設である可能性を示唆しており、この見学者のための利用向上を考えたベンチ設置を提案する。このベンチは園外に設置し、一般の公園利用者がベンチで休憩しながらドッグランを見学することができるようにする。これは一般利用者の視線を受けることで、更なるマナー向上も予想することができ、両者のコミュニケーションが深まることで、ドッグランへの全体的な意識向上を見込むことができるであろう。

（4）「緑陰樹林」の形成

それから、特に夏場の利用時は「涼しさ」が重要となる。犬は人間よりも体温が高く、温度調整機能も劣るため、夏場のドッグラン利用は熱射病や熱中症の危険性がともなう。調査でも、夏場の昼間利用で犬の走り回る様子は少なく、また飼い主も木陰で涼んでいる

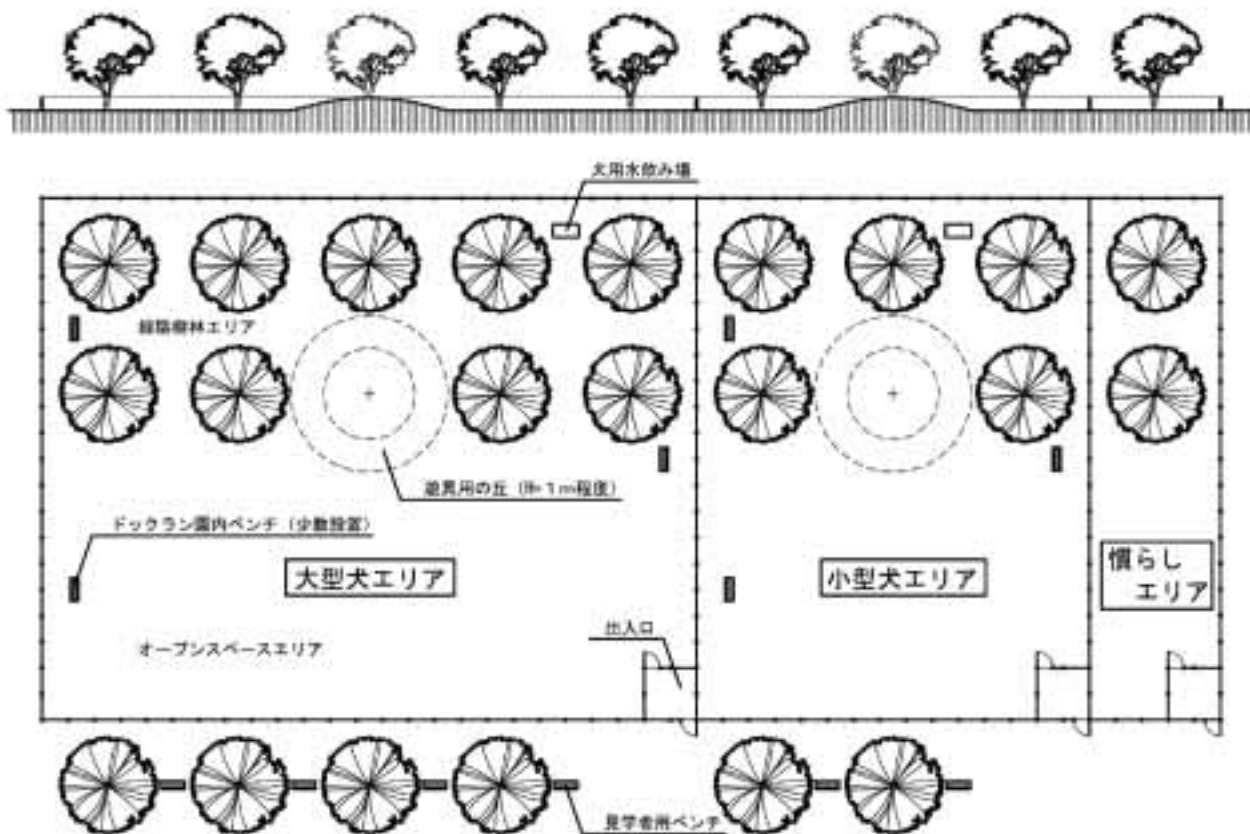


図1. ドッグランの改善計画モデル

状況であった。また水分を欲しがらる犬に、水飲み場で水を与えている飼い主も見受けられた。そこで、ここでは暑さ対策としては緑陰樹⁹⁾を用いて木陰を作ることが、修景上、またヒートアイランド現象対策上も効果的だと考える。

ただし、ほとんどの利用者は涼しい朝夕を利用しており、犬にとっても涼しい時間帯の方が良いと考えられる。しかし現代の社会生活では、犬の散歩の時間は人それぞれにより違っている。夏場の昼間利用者も少なからずいるので、その飼い主と犬のために「涼しさ」の形成が必要だと考える。

4. おわりに

前述の提案を実施していくことによって、より良いドッグラン空間ができると考えられるが、この提案も更なる利用実態調査を行うことでドッグランの施設ならびに運営管理の向上が図れるものと考えられる。また、ドッグランは犬のための施設であるため、今後は犬視点に立ち獣医師等の専門家の意見や、犬の生態にふれた研究をより取り入れたドッグラン整備が重要になるものと考えられる。そして、人と動物との共生社会ができるようにドッグラン設置の拡大と利用マナーの向上を啓発していくことが望ましいだろう。

謝 辞

最後に、本研究に関して、資料提供ならびにヒアリング等に御協力頂いた東京都建設局公園緑地部公園課の方々に、ここに記して感謝の意を表します。

補注および引用文献

- 1) ペットフード工業会の平成12(2000)年度の「全国犬猫飼育率調査」の犬の飼育匹数は約1245万匹であったが、同調査の平成17(2005)年度には約1306万匹となり、わずか5年で約5%の増加傾向にある。また、内閣府が国民の意識把握として平成15(2003)年度に実施した「動物愛護に関する世論調査」によれば、ペット飼育者の中で犬を飼育している人の割合が62.4%と最も多く、次の29.2%の猫を飼育している人を大きく上回っている。この犬の飼育率は同調査の昭和54(1979)年の46.1%から概ね増加傾向にある。
- 2) 財団法人東京都公園協会(2004)都市公園技術情報その6 都市公園におけるドッグラン情報 都市公園 166:98-101.
- 3) 平成18年度犬関係苦情・要望件数(東京都建設局公園緑地部公園課受付分)の統計資料
- 4) 区のドッグランは、新宿区(落合公園, 落合中央

- 公園), 港区(芝浦中央公園)にある(杉並区の桃井原っぱ公園, 中央区の築地川公園では現在試行中)。市や町のドッグランは, 八王子市(七国公園), 日野市(ひのワンパーク), 瑞穂町(みずほエコパーク)にある。ちなみに港湾局のドッグランは, 大井ふ頭中央海浜公園, 辰巳の森海浜公園, 城南島海浜公園にある。
- 5) 東京都福祉保険局(2007)東京都動物愛護管理推進計画～人と動物との調和のとれた共生社会の実現を目指して～, pp.18-19.
 - 6) 愛甲哲也, 浅川昭一郎(2007)都市緑地における犬連れ利用者の実態と意識 ランドスケープ研究 **70**(5): 515-518.
 - 7) この2箇所の調査対象の他の選定理由は, 東京都23区内にある都心の施設として多くの利用者がいること, 双方は距離があるために同一利用者がいないこと, 施設材料(舗装, 植栽等)が異なることで多様な調査結果が得られることである。
 - 8) この「ボールで遊ぶ」等の禁止事項は今後, ドッグランの維持管理や運営に関与しているボランティア団体や公園管理事務所等と連携しながら, 飼い主に対して周知を行う必要があると考えられる。
 - 9) 蜂等の虫が寄り付かない樹種を選ぶことを提案する。例えば, インドセンダン(学名: *Melia azadirachta*, 別名: ニーム)は, 虫を寄せ付けない忌避効果を持つが, 犬を含む哺乳類等の動物に対してはほとんど無害である。しかし, この樹種は, 開花できるほど成長しないとその効果を発揮しないことや, 霜に弱い, 気温が23度以下では成長しにくいなどの欠点があり, 更に樹種選定を検討する必要がある。また犬のマーキングによる衛生面や生育面を考慮して, 樹幹に防護ネット等を設置することについては検討する必要がある。
 - 10) 前掲書2) および東京都建設局公園緑地部公園課からの資料提供ならびにヒアリング調査等から作成した。